

丸ペンのスケッチから (2)

これは一柳邸の外壁パネルの試案を描いたもの。一柳邸の外壁はフラットな表面仕上げになっているが、当初はこのような表情のあるものを考えていた。

PART-5

ある研究室生の回想

■ 広瀬研究室の 27年をふりかえる

これは、1966年から今日までの卒業生11名が集まり、研究室のその時々の変化や出来事、先生の印象などを語り合ったものである。27年間もの長期間になると、草創期の卒業生と今年（1992年度）の卒業生とでは、大人と子どもほどの年齢のひらきがある。

そうした時間のギャップを考慮して、それぞれの卒業生が「自分の知らない時代の研究室生活」を、少しでも実感のあるものにしてもらえればという意図で、この回想記をまとめた。

なお、読みやすいよう、1人の研究室生の回想記風にまとめている。（编者）
編集・文責：玉利精子

草創期 (1966~69ごろ)

■研究室はきれいだった——

先生が武蔵工大にいらしたのは1966年(昭和41年)でした。蔵田先生が亡くなられた後いらして、その時から研究室をもっていました。研究室の場所は今と変わってないんですが、部屋はすごくきれいでした。今では考えられないですが、先生のすわっているコーナーは、フジエテキスタイルのロールブラインドが下がっていて、イサム・ノグチの照明が下がっていて、プロフィットガラスで区切られていました。なんととっても驚いたのは、カーベットの敷いてあることでした。ともかく他の研究室と比べて格段にきれいだし、雰囲気がありました。

当時は、広瀬事務所(広瀬謙二建築技術研究所)の方がまだ数人いました。金津さん、加来さん、池田翼さん、戸川美枝子さん……。事務所はローズウッドのキャビネットと机が4つぐらい並んでいて、きれいなライトがあって……きれいでした!

先生は、事務所としての仕事もやっておられ、教育者としての先生と、実務者としての先生と二とおりの先生がいて、その中で勉強をし、実務も手伝っていたりしました。

■欧州鉄鋼連盟コンペ(1966)

印象に残っているのは、夏にやった鉄鋼連盟のコンペですね。2度の締切のあったコンペで、最初は6月30日が締切りだったのが、要綱も不十分で30日までにヨーロッパのしかるべきところに着くのか、消印有効なのか、——先生は消印有効一点ばりですが——その頃は航空便でも1週間位かかるから不公平だとい

うことで、もう一度8月末が締切りになって、それ以前に送った人は送り返されてきた。で、もう1回やり直すことになりました。最初は研究室と隣の部屋でやっていたのが、2回めはスペースが足りなくなり、夏休みにも入っていたので4階の製図室を借りきって泊りこみでやりました。袴田さんを中心に矢野さん、4年生、広瀬事務所の人たちと、3・2年生で腕の立つのを集めるということで、最後の1週間は40~50人位が、1人4時間の睡眠で交代で24時間労働でやりました。このころの年代の広研の連中は、皆コンペに顔を出してしまっていて、先生と寝食を共にしましたね。

■授業の思い出

1年目(1966)の新学期からフルコースで先生の授業がありました。2年で計画1、製図1で、建築史は、3年の時だったと思います。

以前はケント紙に描かされていたのが、先生が来られてからトレペになって、実践的になりました。黒板に「本日中に提出」と書いてある。本日中とは夜12時までのことで、早くやってしまえば早く帰れるのだけれど、何かと時間がかかってしまい、ほとんどが残ってましたね。家が近い人は帰れるけれど、遠くで帰れない人は、製図室で夜明かししてました。それで、三宅敏郎先生が先生にくっついてかかったことがあるんです。次の朝、三宅先生の講義で、だれも出て来ない。「先生だめですよ、使いものになりやしない」と。

建築史の授業でしたか、先生の最初の課題は、「お寺の三手先を描け」でした。正確に描ける人はいませんよ。先生は、その課題に対して、真っ赤になるくらい一人ひとりに自分のコメントを書いていましたね。

2年生の設計の最初の授業で、名前のレタリングと

が、そのチェック項目がすごかった。何十項目も並んでいて、誰にでも採点できる。例えば、ゴシックでは、たてとよこの比が1:6とか、字体のバランスとか……。今でも、だれだれさんのレタリングという

とに比べて、週に2日は徹夜しないと出来ないのがふつうで、強烈なイメージがありましたね。

■「造」と「DNIAS」

この時代は、「造」と「DNIAS」の活動がすごかった。「造」は思い出深く編集の手伝いをしてましたね、かばん持ちで。編集はもちまわりで、編集会議では栄久庵憲司先生、豊口克平先生、池田武邦さんとか、すばらしい方々に、二十代のはじめに直に接せられ、強烈なものを受けました。計画1だったか、毎週先生方に講義をしていただいたんですが、よかったですね。

「造」の字は、先生のレタリングで。良い本だけけど……、商売にはならなかった……。

「DNIAS」は、〈環境と工学を結ぶ会〉ということで、なんとなく手伝っていました。

■民家研究会の顧問に(1967)

蔵田先生のと、民研の顧問になってほしいと、先生におそろおそろのみに行ったら、快諾してもらいました。それから、蔵田先生時代からのスケッチして、平面かいてといういわゆる民家採集という考えから、実証的な建築史を学ぶという方法論に先生の指導で変わって行きました。私たちがフィールドサーヴェイは楽しいけれど、何かおもしろくないと思っていましたので。それで町田の民家の実証的研究をし、その1つ永井邸は重文になり市の公園に移築されました。

そのうち、また実証ばかりじゃおもしろくないと、デザイン・サーヴェイになっていったんです。



欧州鉄鋼連盟コンペのバス

■「伝統のディテール」と「仕上げと納まり」

「仕上げと納まり」は『ディテール』に掲載されていて、「伝統のディテール」は『ディテール』の連載が終わって、ちょうど単行本にしようとしていた時でした。いきなり何が何だかわからないけどレイアウトをさせられたりしました。伊藤延男さん、鈴木嘉吉さんとか、当時文化庁の主任調査官ぐらいでしたか、皆を前にして、いろいろ記録させられたりして、勉強になりました。

■研究室の生活

はじめの頃は、学部生に机がなく、カーベットの敷の上に車座になってやっていたんですが、皆ほとんど家に帰らない。朝の3時ごろ、車で先生を鎌倉の家までお送りして、私たちがそのまま泊めていただいて、また研究室にいっしょに来るような生活をしていました。当時はコンビニエンスストアなんかなくて、唯一青山の「ユアーズ」が開いていて、夜中に買い出しに行ったりしてましたね。先生の車はコロナでした。

2年目(1967)に学部生の部屋が出来て、ギター弾いて皆で歌ったりしましたよ。この年、一柳邸(SH-67)を、早川さんや、吉田(平井)さん、前田さんが中心になってやりました。完璧なスペースユニットでやったもので、手伝いでデータとりに行ったりもしました。1年下の連中は、屋根にのぼって雨もりの応急処置など、あと始末を手伝わされました。

その他研究室では、岩下さんが設計方法をやっていたり、建築教育で時間と密度の関係とかを研究していました。

■ゼミ旅行

66年の春休みに奈良に行ったのが最初ですね。その時、先生はSH-30など鉄骨の住宅シリーズで有名

で、日本の古建築のイメージが全くなかったので、びっくりしました。

翌年、2回目でマイクロバスを貸して行きました。当時は東名がなくて、名古屋まで中央道の下を長野から木曾に抜けて行きました。それ以来、免許の関係でマイクロバスが運転できなくなるまで、マイクロバス旅行は続きました。そのあとは車で。車の好きな人が多くて……。

■建築家としての広瀬謙二

先生は事務所の仕事もして、実務を手伝わされてディテールを描いたり、夜中まで仕事をしてた記憶があります。先生の帰ったあと、事務所の人と酒を飲みながら、先生の悪口もきかされましたし、良いところもきかされました。またその後、チームランダムに関わるようになってからも、建築家としての広瀬謙二をよくきかされました。そのころ、慕っていた人もいたけれど、逆に恨んでいた人もいた。たいへん気性の激しい方で、敵も多かった。ついていく人は自分を抑えてついていった。ものすごく激しい毎日をおくられているなーと。建築家はこういう生活をするのかと身につまされました。

SHシリーズの中で、家具屋がいて、家具の納め方が先生の基準とちがっていた。その家具屋が相談に来て先生は全くとりあわなくて、家具屋は2時間位研究室の戸口に立っていた。とにかく自分の価値判断からはずれるものは、徹底して許さなかった。

学園紛争 (1970~73ごろ)

■学園紛争がはじまった。

建築学科では、69年ごろから、建築教育に関して学生と先生との間で紛争がありましたね。

70年安保の時は、武蔵工大も紛争に突入していました。その頃は研究室はワンルームになっていて、半分は院生のスペース、半分は先生と助手。院生は学生側だからと院生のスペースにベタベタと貼り紙をした思い出があります。

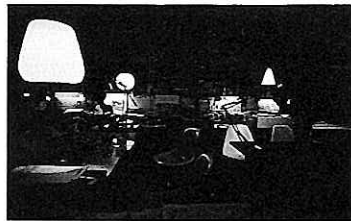
あの時は、団交がほとんどで、学校側はロックアウトもしました。団交している時、先生は例の調子で、腕組みして一言も発しない。動かない。対象的に先生より若い先生たちは、アタフタとしていて、学生たちにも追求されていました。先生の一世代上の酒井勉先生なんかは学生に同情的で、言うならば、オールドリベラリストでしたね。

■沈黙の時——

当時の学部生は、学園紛争の影響をものに受け、ほとんど授業のなかった時期もありました。

そのころの先生と言えば、以前のような澁刺とした感じはなく、じっと何かを待っているような、〈沈黙〉していた時代でした。学生たちも、先生と積極的にかかわろうとはしなく、先生といっしょに何かをやった!という記憶がほとんどありません。当時、院生に矢野さんと岩下さんがいて、この2人についていったという感じでした。

このころは、今までいた助手の人たちが皆やめられ、新たに助手として機械科からIDをやりたいという広藤さんが来たり、ユニークな学生たちなど、い



おそらく1970年代前半の広瀬研究室。 撮影：広瀬謙二

ろいろな人たちが出入りして、研究の方も何でも自由にやっていました。設計方法、建築寸法に関するもの、茶室、鎌倉の景観調査、集合住宅の使い方、かたちの特性、横穴式石室、神社、自然景観、職人技術、などなど。矢野さんの影響で建築史関係の研究もふえてきて、先生は学生たちのすることを見守り、観察していたようでした。

■先生のお母様のこと

72年の2月、ちょうど卒論を提出するころ、先生のお母様が病気で亡くされました。お母様は日本画を画いていらして、先生がはじめ画家になりたいと思ったのはお母様の影響であったときかされたことがあります。

卒論の発表会のあと、学生の部屋で皆で車座になって打上げをしていた時、先生がしみじみと話して下さったことが、印象的でした。

「お母様は元々体が丈夫ではなく、心臓が弱かった。病気になってからは、医者は心臓に関してはあらゆる手をつくして万全な態勢でいたけれど、結局、心臓ではないところで亡くなってしまった。最新医学は、1つのものに対しては最高の医療をするけれど、体全体のことを考えると、バランスに欠けているのではないかと疑問をなげかけ、それが建築界にも言えるのではないかと……。」

■昭和初期住宅

昭和初期住宅の研究は、図書館にある蔵田先生の遺品の整理から出発しました。昭和47年（1972）でしたか。本の方は図書館の方ですでに整理されていたのですが、図面・書簡・スケッチ・メモなど貴重な資料がダンボールに詰められたままでした。そ

れらを1つ1つ分類整理していきました。

はじめて間もないころ、インターナショナル・スタイルの等々力住宅（1936）の1つ、古仁所邸が建て替えて壊されるということで、形に残そうと実測と遺品の中から資料収集、聞きとり調査を行いました（1972）。資料の中からは、等々力住宅がつくられるまでの変遷が明らかにされました。古仁所邸以外の3件の家の存在も確認されて、併せて聞きとり調査、増改築の現状の調査を行いました。それが『都市住宅』誌に〈等々力住宅〉として発表したものです。（7304住宅第4集）調査をしてわかったことは、「雨もりには悩まされたが、住み易かった」こと。意外でしたが、それから昭和初期の住宅に関する研究が展開していきます。

オイルショック (1974~76)

■それでも研究室は活気があった

75年の春ごろだったと思いますが、研究室はワンルームから、まん中に間仕切りが出来て、先生のコーナーと院生のコーナーとはっきり分かれました。入口横のキッチンには「伐折羅」で輸入していたヤコブセンの赤い水洗金具がついていました。突然仕切りが出来てどうしたのかと思いましたが、そのころドクターに2人、マスターに6人、4年生が13~14人居たので、机が足りなかったからかなと思います。それに造形大を出た林さんが助手をしていましたね。不思議な人だった。

ちょうどオイルショックのまっただ中で、就職口がありません。それでしょぼんとしていたけど、研

究室は世の中と全く関係なく活気づいていました。

■歴史環境のコンペ

矢野さんの指導で、歴史的環境の中に建つ建築のコンペをやりました。最初がNIAEの「マチュピチュに建つホテルと研修施設」（1975）で、2回目がセントラル硝子の「歴史的環境に建つ現代建築」（1976）です。マチュピチュはペルーの山岳に建つインカ帝国の遺跡です。もう1つの歴史的環境には佃島を題材にしました。で、両方とも佳作に入りました。入ったというか、佳作にしか入らなかった。つまり、どうもねらいが正統派ではなく、ちょっとずれていたんですね。

2回ともそうだったんですが、最後は4日ぐらい徹夜でバタバタと倒れていく。その中で先生が「間に合わないのだろうか?」と言って、自ら色つけをはじめた。マチュピチュではパステルで色をつけて、その上から色えんぴつで色をつけだした。色えんぴつを使いだしてから俄然はりきっちゃって、つるつるのかでかになるまで10回ぐらい、しつこいぐらいにぬってました。ジクの色が出るという。それから先生の画は色えんぴつ画になりましたね。それ以前は水彩でした。

最後のひとねばりがちがうなー、体力だなーと先生に教えられました。

紛争が終わって (1976~79ごろ)

■特権階級の広研

この頃には学園紛争も終わり、設計をやろうかなーという時期でした。広研は特権階級という意識が

常にあり、設計をやるなら広瀬先生とっていました。先生の授業は必ず優をとれと先輩からきかされていたので、設計1の住宅の課題で空をまっ赤にぬったりしました。先生が赤が好きだというので…。で‘優’をとりました。それと、入る前にはいろいろと噂がとびかいましたね。いわく、手伝いをしないと入れない、院生の推薦がないと入れない、免許がないとはいれない、等々。

入ってみて、作家広瀬謙二と広瀬研究室でやっていることとちょっとイメージがちがいました。研究というものを全然知らなかった子どもだったし、デザインやったと思えばマチュピチュやセントラル硝子のコンペに入ったりして。ちょうどこの頃は、久野さんや新居千秋さんが外国から帰ってきて、スライドを見せてくれたり、外国はいいよとワーッとふきこまれ、大学院よりも外国に飛びちりましたね。

■建築の地方性

先生から、卒論か卒計で「ハウス55をつぶす研究をしろ」と言われまして……。先生はむしろ基本的にはそういう方面にいらした人ですよ。それがいみじくも「くプレファブ」という名のもとにおける大衆操作がいかに日本の建築界を悪くしたか、当のボクが言っているのだから間違いない。鉄骨の家なんかとんでもない」と。「ハウス55なんかとんでもない。地方性だ!」と言うんですね。

それで木造の木割の各地方特性の調査をはじめられた。計画1の課題で、「地元工務店を2-3軒まわって寸法を測ってヒアリングをしてこい」というのがありましたね。その後、木造の剛接合のディテールを模型でつくられたりしていました。

■石は1400年、コンクリートは60年

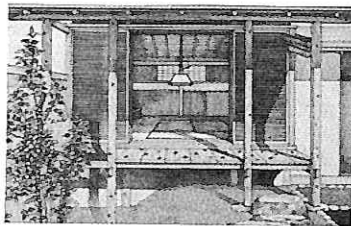
研究室では、名護市庁舎のコンペ（1978）と、マドリッドのイスラミックセンターのコンペ（1979）をやりました。先生は、とにかくセメントとかコンクリートを使うのは悪だと。石は何百年ももつがコンクリートは60年だと。名護もマドリッドもコンセプトの中に、「石は1400年、コンクリートは60年」と入っていました。しかも先生は、書家を連れてきて字までデザインしてしまっただけで、かっこいいと思いました。

それから木の調査もしました。木曾に講演に行かれて、桧の切り株をもらってきたんですね。で、その桧は何百年たっているとか、柱に節が何ヶ所あるかなどをやりました。

肆木の家 (1979~83ごろ)

■自邸の設計

「自邸を設計しはじめたのはいつ頃?」
「ボクが卒業するころかなー（1977）。遊びに行くたびに図面を見せられた」
「材木座で建て直そうとしたんだけど敷地が狭くてどうやってもはいらない。いろいろきいて、あの土地を売って、新しいところを買えば家一軒建ててくれるの予算が出そうだとわかって、売っちゃおうと」
「最初は〈肆木の家〉スタイルではなかったですよ」
「ボクは1回やってみないとわからない。次のステップに行けない。で、まとめてみて、もっとやってみよう」



肆木の家

「設計をはじめてから出来上がるまで4年?3年?」
「設計は勝又君のころ（1979）、建てはじめは（新妻）大祐の代（1980）」
「完成しないうちに修理がはじまった」

■ニッカーボッカーと地下足袋の学生生活

毎日毎日、朝、尾山台で何人来るかわからない下級生を待って、鎌倉の現場に通いました。すごい傾斜地で、はじめて連れて来られた時は、いったいどこに建つのか分からなかった。先生は朝9時ごろには現場に行っていて、ひとりで黙々と木を削っている。私たちが行くともう居ました。悪いなーと思いがら、研究用に8ミリをセットして、1時間ぐらいやると、さーっといなくなる。2時間位帰って来ない。食事に行ってるんですね。帰ってきてからは暗くなるまでやりましたね。毎日毎日。チンタラチンタラと。

軸組を建てる時がいちばん苦勞しました。順番があつて、1つ間違えると全部解体しなければならない。最初、階段まわりからはじめて4-5回やり直しました。下階で根太をかけて、コンパネをはって、ようやく作業できる状態になって少しづつ建ち上がってきたかなーと。

プロジェクトチームで、部位別に屋根、壁、床、軸、窓廻りと担当してやりましたが、全体ミーティングはまともにやりませんでした。皆、墨つけからやっていたから、内容は理解していて、実践で進めていきました。墨つけ、部材の加工が終わって、あとは組立てだけとと思っていましたが、現場でキザみながらやらなくてはならない作業が多くて、どうなのかと思いましたよ。部品図は2千枚あって、むずかしい仕口は現寸で描いていましたね。

要所要所は、プロの左官屋や屋根屋さんたちに来てもらいました。さすがプロですね。すごいな-

と思いました。大周建設の大工さんたちも最後まで手伝ってくれました。最初は何やってんだと冷たい目で見ていて、口もきいてくれなかったけど。上棟式も手伝ってくれなかったら出来ませんでしたね。あと益子さんが来てくれ、ハッパをかけられました。

■完成するまでやりとげる

壁のヘーベルを貫と貫の間にはめるのに、最初予定していたのでは絶対にはいらない。いろいろと工夫してやりましたね。風でとんでっちゃうのではないか、このままではまずいとか、個人個人で、ひしひしと使命感みたいなものがありましたね。ずーっとやっていて、そのまま壊れちゃうんじゃないかとも思いました。

出来上がると‘わが子’みたいで、先生にあげるのはいやだ、もったいない……。最後のガラスを嵌める時は感激しました！

先生は「かたちにしないと意味がない。いくら一生懸命やっても途中でやめたら意味がない」といつも言っていましたけど、肆木の家をやって分りました。

82年の暮れには終わりました。

そのあと、急に広研への希望者が減りました。

自邸以後 (1984～)

■その後の研究室

肆木の家をやったあとの研究室は、木造とか歴史のイメージが強かった。それと24時間営業のイメージがかなり定着していました。

肆木の家については、若干メンテナンスをやりま

した。風呂に入ると向こうがすーっと見えますよね。だから絶対風呂に入れと言われて風呂に入ったり、階段を下りてくるとディテールがパッと見えますね。見せてるなーと感じたり、味わう立場でいました。卒論はほとんど歴史になりました。最初はやりたいことを好き勝手に言い合っていたけれど、それは誰かがやった、それは彼がやると全部否定されて、それぞれ歴史ものをあてがわれてやりました。富士市の壑穴式住居の復原とか、上野国分寺の復原、出雲大社の復原予想図、秋田の弘田橋など、歴史づいていました。

■インド海外研修旅行

印象に残っているのは、なんといっても皆でインドへ行ったことです。3月に卒業式にも出ないでインドへ行って、帰ってきたら赤痢になって入社式にも出れませんでした。東海大の記号論の先生や、インド5回目という70すぎのおばあさん2人も同行したんですが、年輩の人はかからない。その辺でなんでも飲み食いする連中がかかった。18人中6人でしたか。

先生は暑い中でもよく歩くんですよ。インドの3月は初夏で、日中35度ぐらい。夕方、内陸は涼しい。ほこりっぽいけどカラッとしている。ボンベイは暑かったけど。デリーで1日足どめくって、医者呼んでもらったんだけど、注射打って何でもないと言うし……。

法定伝染病だから、2週間隔離されていました。でも夜になると、病院内で、インドに石を買いに行ったおじさんとか、夜勤の看護婦さんらを集めて、インドのスライド大会なんかをやっていました。赤痢にはなったけれど、旅行自体はすごくおもしろかった。石窟寺院でも人間わざというか、スケールの大きさが今のスケールと違うじゃないですか……。

■レクチャー・シリーズ (1986～)

レクチャー・シリーズは、アメリカの教育にならってはじめられました。1986年からだったと思います。実社会で働いている人を招いて、学生主体に討論をしながらレクチャーをしよう。はじめは学校単位で考えていたんですが、むずかしいので、研究室のプライベートなレクチャーにして、学生のみではなくOBの人たちにも来てもらいたいとはじめられました。

年に2-3回のペースで、1回目は高橋航一さんと、宮脇檀さん、海老原一郎さん、丸山欣也さん、アーキビジョンの戸尾さん、山本理顕さんら、最初は先生となじみの深かった人たちに来ていただきました。スライドを見せてもらいながら、実際やっている仕事を通してどんなことをやりたいのかという話しを夜7-8時ごろから、夜中の12時ごろまで延々とやっていました。

平山忠治さんがいらした時は、ちょうど坂本龍馬記念館のコンベをやっていた時で、模型の写真の撮り方を指導してもらいました。「あの蛍光灯の光でいい。ちゃんと影ができるだろう。ライトをつけちゃだめ。ファインダーをのぞいてみる」と。職人的でしたね。

ただ最初の意図とはちがって、討論というより一方通行になってしまうことが多く、活発とはいいがたいけれど、現在も続いています。最近、坂茂さん、大野秀敏さんとか若手になっていますね。

来ていただいた方々には毎回、色紙を書いてもらっていて、研究室に置いてあります。

雑感—こぼれ話

G 僕が大学院の入学通知をもらった時、先生が「ところでG君、自邸をやらない？」ことわれなくて……。柱の長さが全部ちがう。先生を恨みましたよ。

P それはH君が悪いんだよ。基礎の高さを全部変えちゃうから。

H 版築でやりたいというから……。

D 伝統的なものがどれだけ大事か。法隆寺の木は、1300年もつけど、洋釘を使った木造住宅は10年もたったらボロボロだという話を、ボクが学部のあるところ(1974ごろ)からしていた。

P それを定量的に証明したのは大祐の代だ。

G 毎日毎日鎌倉へ行って、下の連中がよくついてきた。先生は真夜中と授業の時しか研究室に来ない。

P 今だから思うんだけど、よく出来たねと思うよ。

G あのころ、学生が来なかったり、来たはいいけどどっかへ行って帰って来なかったり。先生はどう思っていました？

P 忍耐！ 自主的な参加で強制するつもりはないから。

G ところで、大先輩方にうかがいたいのが、先生を見られて変わったところはありますか？

A 先生はやさしかったと思っている。あまり変わってない。今ここに居るとタイムスリップした感じで、20年前と変わらない。

E 強引さは変わってない。10億円ぐらいの病院の監理を、大学院生にさせちゃった。

A そういうむちゃくちゃさは、一柳邸をやっていた時と同じだ。すごいいい経験だと思う。

F がまん強い。ボクたちが何をやっても、じーっと見ている。

C 手持ちのコマの中で、経験不足だけどやらせら

れる。強引さとはちよっとちがうけど……。

E 社会に出て、いろんな建築家にお会いしたけど、やっぱりちよっと普通じゃない。建築家になれないなーと思いましたよ。

A そういうところがありますね。

E ここ5-6年研究室を手伝うようになって、先生がしみじみと言われるんですよ。「(学生が)目の前を通り過ぎていく。やっとなったのかと思ったら出ていってしまう」と。

A 工場の設計をやっていた時、鉄扉があって、いわゆる甲種防火戸みたいな図を描いて先生にもっていったら、「デザインされてないじゃないか」と言う。設計の中で流しちゃう部分があるけど、先生はそういうところにも執拗なんだよね。決まってるものでも今度はこうしようと考え直す。強烈な印象で、すごいタフだなーと。

E 頭からダメだとは言わない。いろいろ話して、時に黙っちゃったりするけど、最後には自分の道へもっていく。ねばり強さと執念の強さがありますね。

B おおへますよ、先生の口癖。

E 変わったといえば学校も変わってきたんじゃないか。60年代とは意気込みも社会的なあり方もちがってきた……。

D 僕らの2度めの学園紛争(1974ごろ)で、ヘイが出来た。武蔵工大はそれまで塀がなかった。夜中でも2号館にスーッと入れた。そのへんから変わってきたようだ。そういう中でも、広研は不思議に自由だった。

E 学生は変わった。先生は変わってない。

C 基本的に変ってない。発想法は変わってない。

P きわめて主観的な見方だけど、少なくとも矢野君ぐらいまでは、本気で学生と対していた。本気でというのは、彼らもプロなんだ、そういう意識をも

っていた。学園紛争以後、それはなくなって、学生というのは特種な人種なんだと思った。その点、対応の仕方がちがってきたらと思う。

B 先生もそうだけど社会も変わった。先生は本当は感覚派の人間だと思う。自分の方法論を客観的にみようという冷静さがあったけど。最近、昔より多少自分に正直になったんだと思う。

P 今だから言うけど、学生は以外に優秀なんだと思ったことがある。事務所をやっていた時はワンマンだったけど、僕がこう思うと言うと、私の気持ちをくんですべてやってくれた。学生はそうはいかない。

逆に彼らにまかすと、必ずしも僕の思ったこととは違うのだけれど、それなりの成果は出てくる。はじめはそのギャップで、学生は特殊なんだと思っただけど、学園紛争を経験して僕自身の考え方が変わったんだと思う。学生を主体にしてものを考える。その方が僕も気楽だし、結果としていいものが出てくる。肆木の家をやっている時はやきもきしたのも事実だけど、そういう見方をしている限り、学生はまかせておけばやってくれる。とにかく忠実にやってくれる。職人だとああはいかない。安心してまかせられた。そのかわり、先がちよっと読めなかった。

A 学校も出てから何年もたつと、学生だったころを忘れてしまいますね。

出席者 (卒業年)

広瀬鎌二 (* : 文中のP)

倉斗道夫 (67) 三登真吾 (68) 矢野和之 (69)

玉利精子 (72) 松成和夫 (75) 尺田可規 (77)

河村敏孝 (79) 勝又英明 (80) 新妻大祐 (81)

小林秀憲 (82) 星整洋 (85)